‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

19号 1990.11.21

文・編集・発行
恋怪子

ARTIST：STEVE VAI

音楽というものはパーソナリティの完璧な反映だと思うよ。楽器を演奏する時、ミュージシャンは素っ裸で人前に立っているのさ。パーソナリティの反映といっても、例えばいいカロ減なプレイをする人はいいカロ減なミュージシャンで、速弾きするギター・プレーヤーはハイパーな人だというような次元のことではなくて、すぐにはわからないようなその人の個性、その人の人間性というようなもののことだよ。

音楽において唯一意味のあることは自分を表現することであって、他人のやったことや、やっていることを表現することではないのさ。これは言葉で言う程簡単なことではないし、本当にそういうことが出来るためには勇気がなくてはならない。しかし、それが出来なければ、音楽をやっている意味は殆どないと言っていい。

照明とかアンプからはね返ってくる音とか、インスピレーションのもとは数限りなくあるよ。釘を打っていたってインスピレーションは受けるし、自転車に乗って美しい自然の中を駆けめぐる時だって神がかりのインスピレーションを受ける。ただし一番大切なことは自分の中にインスピレーションを宿していることだと思うんだ。何かに触れた時、その本質を見抜き、そのエッセンスを取り出し、音楽を通して、他の媒体を通してそれを表現出来る能力——そういうものが自分の中になかったら、どんなにもがいてもどうにもならない。

（インタビュアー：林洋子）
BURRN! 1988年8月号より.

スティーヴ・ヴァイがインタビューに答えていっていること、それ自体は私にとってあたらしいことでも衝撃的なことでもない。それ自体は。だけど武道館で、スティーヴ・ヴァイのステージを見て、ギターをきいたあとで読んだら、そのすごさがわかる。スティーヴ・ヴァイの考えのすごさでなくてその考え、その思想に生きているすごさ。ギターを弾くことで、思想に生きていることを感じさせる。その思想は新しいものでもなんでもないけど、ギターを弾くこと、音楽に生きることから、それを獲得し、それに生きているのは、独特で新しいものだ。

CD：STUART HAMM 「KINGS OF SLEEP」

（写真はジャケットの裏面）

LIVE：WHITESNAKE

1990.9.25 日本武道館
1990.9.26 日本武道館

ホワイトスネイクのライブに行く気になったのは、スティーヴ・ヴァイを見たかったから。ホワイトスネイクの新しいアルバム「SLIP OF THE TONGUE」をきいて、それまで特に好きでもなかったホワイトスネイクが気にいって、スティーヴ・ヴァイというギタリストが入ったということをはじめて知ったのだった。スティーヴ・ヴァイというギタリストは、7本の弦のギターを弾くとか、そういうすごさも、きいたり読んだりしたことはあったのだろうけれど印象に残っていなかった。どうも私はライブを見たりCDをきいたりして、いいな！と感じないと顔も名前も覚えないらしい。

9月25日 日本武道館
見たかったスティーヴ・ヴァイがステージにいるというのに全然胸がときめかない。音楽に緊迫感がなくて、前半は椅子にすわってほとんど居眠り。後半も、スティーヴ・ヴァイのソロのときと、アンコールの一曲だけ目がぱっちりさめただけで、あとはぼんやりしていた。ハードロックというものはこういうもの、というふうにしか感じられなくて、ハードロックのベンキョーみたい。ベンキョーきらいだからねむってばっかり。

9月26日 日本武道館
スティーヴ・ヴァイはすてきだねえ。1人だけコスチュームが派手でキラキラ、ピカピカ。ギターもハデハデ。動きも1人だけちがって目立って。そして、こともなげにすごいギターを弾いて…。ほんとにすてき。だけど、それがホワイトスネイクの1人として実にしっくりはまっている。あんなに1人だけちがって目立つ様子をしているのに感じ悪くない。だからあんなにすてきなんだ。この日はスティーヴ・ヴァイというギタリストのいるホワイトスネイクという感じだった。
スティーヴ・ヴァイはもちろんすごいけど、そういうスティーヴ・ヴァイをいれてやっぱりそれをホワイトスネイクにするデヴィット・カヴァデールもすごい。きっと、ものすごくホワイトスネイクを大事にしているにちがいないデヴィット・カヴァデールが、スティーヴ・ヴァイに、ギターを宙にのぼられたり、アンプによじのぼってギターを弾かせたり、あの[illegible]のギターを弾かせたりするんだからね。ヘヴィなブリティッシュ・ハードロックの雄がね。デヴィット・カヴァデール、すごいね。すてきだ。武道館のライブのあと「SLIP OF THE TONGUE」ばっかりきいているが、デヴィット・カヴァデールのすごさが実によく伝わってくる。

LIVE：JOE SATRIANI

1990.9.18 横浜新都市ホール
1990.9.19,20 五反田簡易保険ホール

9月18日 横浜新都市ホール
だいぶ前にジョー・サトリアーニの「FLYING IN A BLUE DREAM」というCDがよくて、そればっかりきいていたことがあって、楽しみにしていたライブ。ギター（ジョー・サトリアーニ）、ベース（スチュアート・ハム）、ドラム（ジョナサン・ムーヴァー）の3人編成。ジョー・サトリアーニが何曲かは歌も歌う。CDをあまりにきいていたからだと思うけど、ジョー・サトリアーニには、おどろきといったものは感じなかった。そのかわり、ベースのスチュアート・ハムにはものすごくおどろかされた。いちばんうしろの席だったから弾いている様子はよく見えないんだけど、もう音がすごく伝わってきた。美しかった。途中、スチュアート・ハムのベース・ソロが2曲入るんだけど、あんなのいままできいたことない。

9月19日 五反田簡易保険ホール
この日は席も前で、はじめっから終りまでスチュアート・ハムばっかり見ていて、あのソロを今か今かと待っていた。!!!

9月20日 五反田簡易保険ホール
3日目。意を決してウォークマンでかくし録りをした。あのベースの音をどうしても録っておきたかった。この日はジョー・サトリアーニもなかなかよくて（1日目も2日目もとてもよかったんだけど、スチュアート・ハムにおどろかされていたから）心うばわれた。

MORE STEVE VAI：スティーヴ・ヴァイのソロアルバム「PASSION AND WARFARE」ももちろん!!! だけど、私はホワイトスネイクの「SLIP OF THE TONGUE」のスティーヴ・ヴァイが好き！先日スティーヴ・ヴァイの出演している映画「クロスロード」のビデオ見せてもらった。すてきだった。そしてラルフ、マッチオのギターの演奏をしているラルフ・クーダーのギターよりもスティーヴ・ヴァイのギターの音の方が魅力的に感じられた。

スチュアート・ハムとスティーヴ・ヴァイが一緒にやってるんだって!! それが見られるならアメリカにとんでいきたい！